

## 金子武蔵先生を偲んで



故 金子武蔵先生

讃岐 和家

金子武蔵先生は、1985年8月に本学大学院教育学研究科の客員教授を辞任された後は、杉並区高円寺南のご自宅で読書と研究と論文執筆の日々を送ってこられたが、昨年12月3日の夕方、胸部の不快感を家人にうたえられ、近くの清川病院に入院された。10月12日に行われた日本学士院の例会で発表された「ヘーゲルのテュビンゲン手記——民の宗教について——」の原稿を学士院紀要に寄稿すべく手を加えられて、114枚の原稿を書きあげ筆をおかれた直後のことであった。

清川病院の医師の診断は中程度の心筋梗塞ということであった。ご入院後数日を経て、次第に快方に向かわれるように見えて、私たちは愁眉を開いたのであったが、12月31日の午後、再度の発作を起こされて急逝された。享年82歳であった。まことに痛恨の極みである。

金子先生は、神戸の鈴木商店の大番頭金子直吉氏の次男として1905年1月21日、神戸市にお生まれになり、高知中学校、第三高等学校をご卒業後、東京帝国大学文学部哲学科に進まれ、1928年にここを卒業された。その後、大

学院での4年間のご勉学、および東大文学部での3年間の講師を経て、1938年4月に東大文学部倫理学科に助教授として奉職された後、定年退職された1965年3月までここで倫理学および西洋倫理思想史の講座を担当された。1946年以後は、教授であられた。この間、1943年には、「ヘーゲルの国家観」の論文により、東大より文学博士号をお受けになった。定年によるご退職と同時に東京大学名誉教授となられた。

その後、1965年4月より先生は成蹊大学文学部の教授となられ、1970年3月、ここを退任された。当時、ICUの教育哲学研究室では大学院教授の小島軍造先生の定年退職を目前にしていたため、私たちは金子先生に小島先生の後任としてきてくださるようお願いした。先生の倫理学の中心概念のひとつである「実存理性」の概念を解明するご研究として、1965年以降、雑誌「心」に「キリスト教について」と題する36回の連載論文を發表し、キリスト教に大きな関心をもっておられた先生は、私たちの願いにご快諾を与えられ、ICUにきていただいたのであった。金子先生には、1971年4月から1975年3月までは大学院教授として、また1975年4月から1985年8月までは大学院の客員教授として教育哲学の講義および演習をご担当いただいた。1971年4月から連続して14年半にわたってICUにご出講して頂いたこととなる。ICUでの先生は、はじめの頃は『精神の現象学』、『法哲学』等をテキストとしてヘーゲルの講読を行われ、その後はギリシア思想とヘブライ思想における人間観の比較などを講義され、1980年代に入ってから、イエナ期のヘーゲルを講義された。1977年11月に先生は日本学士院会員となられたが、学士院での例会においては4回にわたって初期ヘーゲルの思想形成の過程について發表された。ICUでのご講義はこれらの發表とほぼ対応していたように思われる。

1985年の秋学期開始を前にして、8月14日の日、先生はICUに来られ、高齢の故に客員教授を辞任したい旨の辞表をご自身で学務副学長のキダー教授に提出された。キダー教授の所から教育学研究科の事務室に戻ってこられた先生は、居合わせた者たちに少年時代の思い出話などをされながら歓談さ

れた。お宅に帰られるとき、「記念に色紙を書いて下さい」と私たちがお願いしたところ、こころよく二つの句を書いて下さった。そのひとつは、易経の「天行は健なり、君子は以って自彊息（や）まず」であり、もうひとつは論語の「仁に里（お）るをもって美となす」であった。このふたつの句は先生のお人柄を如実に示すものとして大変印象的である。

易経の句が示すように、先生は学問の研究と教育の道を一途に歩み通された方であった。哲学、倫理学、西洋倫理思想史の領域で、たえず真実を求めて、広く学び、かつ深く思索された。先生の学生への訓練と指導はきびしさを極めたものであった。しかし、先生はそれ以上のきびしさをもってご自身をも律しておられた。

他面において、論語の句が示すように、先生はあたたかい思いやりの心にもちた方であった。先生から原稿の清書を頼まれて、おとどけに上がると、いつも心くばりのゆきとどいた小さな品を用意しておかれて、「すまん、すまん、これをもってゆけよ」と言いながら下さったことを思い出す。

金子先生のご業績としては、約30冊のご著書、約20冊のご編著、約150篇の論文、およびヘーゲルの『精神の現象学』の訳出を中心とする翻訳がある。これらのご業績を通じて、先生は哲学、倫理学および西洋倫理思想史を古代ギリシアおよびイスラエルから現代に至るまで広い領域にわたって研究し、日本におけるこれらの学問分野の研究の進展に絶大な貢献をされた。とくに顕著なご業績の領域として次の5つをあげることができよう。①『ヘーゲルの国家観』（1943年）、ヘーゲルの『精神の現象学』の翻訳（1932年から1952年まで20年をかけて訳出された後、詳細な註をつけた改訳を1952年から1979年まで27年をかけて出された）、および日本学士院紀要に寄稿された初期ヘーゲルに関する3つの論文を代表作とするヘーゲル哲学の包括的なご研究。②『実存哲学』（1948年）および『実存理性の哲学——ヤスパース哲学に即して——』（1953年）を代表作とする実存哲学のご研究。③『近代ヒューマンイズムと倫理』（1950年）を代表作とするイタリア・ルネサンスおよび宗教改革の倫理思想のご研究。④『倫理学概論』（1957年）を代表作とする倫理学

の体系的理論のご研究。⑤雑誌「心」に寄稿されたキリスト教に関する一連の論文、すなわち「キリスト教について」（1965年7月号から1969年4月号まで36回連載）、「使徒信条」（1971年11月号）、「ホセア」（1974年5月号から同年10月号まで6回連載）を代表作とするキリスト教のご研究。

生涯を通じて休むことなく研究を続けられた金子先生は、そのご研究を通じて、人間は、超越的で絶対的な「理法」を畏敬しつつ、各自の個性的・主体的な「実存」を通じて、この「理法」を今一此処における社会的生活に映し出すことを求めて「自由」と「真実」と「一貫性」と「交わりへの意志」とを保ちつつ日々のつとめ（日々の要求）にいそむべきであると説かれた。この教説は、古代から現代に至る西欧の主要な倫理学説をふまえつつ、現代人の生きるべき道への指針を示したものであり、この点において金子先生のご業績は永く銘記されてゆくにちがいない。先生の示された現代人の倫理を教育活動によってどのように実体化してゆくべきかという課題の重さを心にひしひしと感じている。